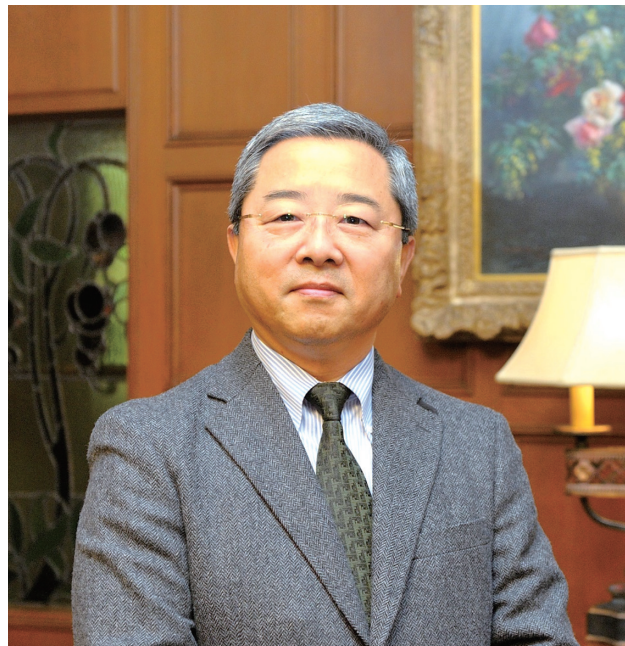


宮本 篤 教授 (医学部医学科学科目 医療薬学)



略歴

- 昭和 49 年 3 月 北海道立美唄東高等学校卒業
- 昭和 53 年 3 月 東北薬科大学 (現 東北医科薬科大学) 薬学部薬学科卒業
- 昭和 53 年 6 月 薬剤師免許
- 昭和 53 年 7 月 衛生検査技師免許
- 昭和 55 年 3 月 東北薬科大学 (現 東北医科薬科大学)
大学院薬学研究科博士課程前期修了 薬学修士の学位授与
- 昭和 55 年 4 月 国家公務員共済組合連合会幌南病院 (現 KKR 札幌医療センター)
薬剤科 薬剤師
- 昭和 56 年 4 月 札幌医科大学医学部 研究生
- 昭和 57 年 1 月 札幌医科大学医学部薬理学講座 助手
- 昭和 61 年 3 月 薬学博士の学位授与
- 昭和 63 年 4 月 札幌医科大学医学部薬理学講座 講師
- 昭和 64 年 米国国立衛生研究所 (NIH) (米国国立老化研究所細胞分子生物学部門)
客員研究員
- 平成 6 年 4 月 札幌医科大学医学部薬理学講座 助教授
- 平成 6 年 カナダ・アルバータ大学 国際医学交流事業・派遣研究者
- 平成 14 年 4 月 札幌医科大学医学部医療薬学 教授 附属病院 薬剤部長
- 平成 24 年 4 月 札幌医科大学保健医療学部看護学科基礎臨床医学講座 教授 (兼務)
- 平成 24 年 4 月 札幌医科大学助産学専攻科 教授 (兼務)

大学役職歴

- 平成 4 年 7 月 札幌医科大学医学部 医学教育専任教員 (初代)
- 平成 14 年 4 月 札幌医科大学附属病院 病院長補佐、治験センター長、医薬品安全管理責任者

[所属学会・主な学会活動等]

日本医療薬学会
日本緩和医療薬学会
日本薬学会
日本医薬品安全性学会
日本静脈経腸栄養学会
日本医学教育学会
日本神経化学会
日本薬理学会
国際神経化学会
米国老年病学会

[受賞歴]

平成 30 年 6 月 日本病院薬剤師会 病院薬学賞

19年の学び

宮本 篤

医学部医学科学科目 医療薬学

平成14年9月に札幌医科大学医学部薬理学講座助教授兼ねて医学教育専任教員（初代）から医学部医学科学科目医療薬学教授（兼附属病院薬剤部長）に昇任して、お蔭様で足掛け19年が経過した。大学院修了後、2年余りの病院薬剤師実務を経験し、札幌医科大学医学部薬理学講座に助手として採用されたのは昭和57年1月、通算すると札幌医科大学に奉職し早や38年3か月が経過、海外留学も経験させていただき人生の半分以上を札幌医科大学で学ばせていただいた

教授就任時には、「社会貢献を念頭に置き、顔が見える薬剤師職能を目指し、教育・研究と薬剤部統括を両立させたい」とのスローガンを掲げ奔走してきた。皆様に支えられ、何とか無事に最終講義の日を迎えられたことに深謝し、これまでの教授就任後の足跡をたどりながら最終講義とする。

教育面では、本務である医学部で授業科目「医療薬学」や「統合医療学」を主担当し、「医学入門セミナー」、「医療安全管理学」や「臨床実習スタートアッププログラム」にも関与した。医薬品の適正使用は勿論、処方箋に関連した医師法第22条や薬剤師法第24条、保険医療機関及び保険医療養担当規則における診療の具体的方針、処方箋記載のポイントとピットフォール、薬剤のあらゆる不適切問題を含む概念へ発展し医師国家試験にも出題されているポリファーマシーや漢方医学を中心とした統合医療の重要性等について教授した。国策である後発医薬品の使用促進に関連して、2年ごとの診療報酬改定の度に処方箋様式が変更され、教育上の変更・対応に苦慮したことは記憶に新しい。兼務となっている保健医療学部や助産学専攻科では、医療薬学的側面からメディカルスタッフに必要な臨床薬学の基礎や周産期・新生児期における薬物療法の問題点を教授した。講義では常に平易な言葉で教授することを心掛け、これまでの在職中、一度の休講もなくカリキュラム通りに出講してきたことを自画自賛する。

研究面では、近年注目を浴びている個別化医療、いわゆるオーダーメイド医療における薬物療法において、個人の遺伝的な特徴や体質をもとに患者個々に最適な薬剤を選択し、最適な用法・用量で治療することが最

大の目標である。このような薬物治療において、薬物の体内動態や応答性、副作用発現の個人差や個体差の重要なファクターの一つは薬物体内動態関連遺伝子の一塩基多型（SNPs）を含む変異や多型である。近年多くの分子標的薬等が上市され治療の幅が格段に広がっているが、それらの効果を最大限引き出すうえで治療薬物モニタリングは欠かせないことから、副作用と各種薬物動態関連因子の遺伝子多型等との関連も含めて解析し、個別化医療の推進に努めてきた。さらに、大学院医学研究科の指導を通じて、医療の進展に貢献すべく各種疾患の薬物療法に関わる臨床的研究も展開しながら、次世代を担う医療人の養成を心がけてきた。医療現場で転倒・転落は患者のADLを低下させる要因の一つであり、多剤投与が転倒リスクに大きな位置を占めている。我々の調査研究から、睡眠薬自体が転倒・骨折のリスクとなること、新規作用機序のメラトニン受容体アゴニストやオレキシン受容体アンタゴニストは転倒・骨折との関連性が低いとの成果から、院内での多職種連携の重要性を強調してきた。お蔭様で多くの研究発表が、学会等で受賞・表彰された。

一方で、医療現場における医薬品関連事故防止対策は、安心・安全で質の高い医療の実現に向け最重要な課題である。多層バック製品の普及に伴って隔壁未開通投与が報告されていることから、看護部の協力もいただき未開通投与防止装置が新たに装着された輸液製剤を検証研究し、その高い有用性を報告した。また、感染・リキャップ・誤投薬防止機能を備えた、より安全な注射処置を目指したプレフィルドシリンジを製薬企業に考案し、改良が実現した製品が現在医療現場で高い評価を得ている。

医療面では、昨今の医療の進歩は目覚ましく、病院に勤務する薬剤師を取り巻く環境も激変してきた。現在の薬剤部は、私が教授・薬剤部長に就任した当時と比較すると、薬学教育6年制を修了した多数の薬剤師を含め、何分平均年齢35.6歳の若い組織に変貌している。

昭和63年に入院調剤技術基本料（現在の薬剤管理指導料）が設置され、薬剤師が病棟で活躍し始めてか

らすでに 30 年以上が経過した。この間、薬剤師の病棟業務はいわゆる技術料として評価され、複雑化する医療の中で患者の安全を確保するうえで、その業務の価値が徐々に大きくなってきた。平成 22 年に病院における医師不足対策の一環として発出された医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」によって、医療現場におけるスキル・ミックスが加速し、さらに平成 24 年の診療報酬改定で「病棟薬剤業務実施加算」が新設された。この加算はこれまでのような技術料ではなく、ヒト、すなわち薬剤師が病棟にただで価値があると認められた画期的なものであり、患者・医療安全の要としての役割を果たすべく病棟への薬剤師配置が急速に進んだ。当院でも数年間かけて準備を進め、平成 27 年より 22 病棟 23 部署へ薬剤師の専従配置を完了した。チーム医療の一翼を担う薬剤師に重要な問題解決能力を身につけるため領域ごとの認定や専門薬剤師資格を取得いただき、弛まぬ探求心と理論的な思考能力を酒養しつつ、安全で質の高い薬物療法の提供を目指し、各診療科のみならず医学系研究科と連携しながら様々な研究を展開してきた。病棟業務に従事する薬剤師は、日常診療の中で感じた疑問を解決すべく、レトロスペクティブな調査に留まらず、前向き観察研究にも積極的に取り組んでいる。

終わりに、小生の教授・薬剤部長就任後の足掛け 19 年にわたる教育・研究・医療は、度重なる制度改正・法改正・診療報酬改定などに大きく影響されながら、

その対応に日々追われ歩んできた。今日の私があるのは、周囲にいた方々の御指導の賜物である。私が助教授に昇任した平成 6 年、東北大学名誉教授 故小倉保己先生からいただいた手紙の一端を紹介する。小倉先生は、日本の薬理学の発展に多大の貢献をされた方で、大学院時代の恩師であり、札幌医科大学医学部薬理学講座に入局する道を導いて頂いた方でもある。「欲窮千里目更上一層樓（千里ノ目ヲキワメント欲スレバサラニノボレー層ノ樓）。将来を見通したいと望むならば努力して一段高いところへ登れば、今まで見えなかったものが見えてくるはずである」との書状を頂き、この漢詩を忘れずに精進してきたつもりである。一方、世間にはよく知られている言葉として「ホウレンソウ」がある。勿論ポパイが食べる野菜ではなく、報告・連絡・相談を略したもので、社会人になったら必ず先輩や上司から叩き込まれる言葉である。緊密な連携の欠如から、人命に係わる例が後を絶たない。典型的な「ホウレンソウ」の欠如といえる。医療の場においても、患者-医療従事者間での意思疎通は非常に重要である。無関心と無責任が悲惨な結果を生むことが無いよう、常に努力し心掛けるべきである。挨拶はより良い人間関係を構築する基本となるので礼儀正しい挨拶をすること、そしていつも感謝の気持ちを忘れないことである。健康寿命の延伸や人生 100 年時代に向けた全世代型社会保障の実現が求められる中、開学 70 周年を迎える本学の更なる発展を祈念し、最終講義とする。

業績一覧

1. 著書

- 宮本 篤. シグナル伝達系 (GTP 結合蛋白質 [3 量体型], アドレナージック受容体, cAMP, Ca²⁺動員) 長寿科学事典 (監修: 祖父江逸朗), 医学書院, pp.171-172, 179-180, 181-182, 182-183, 2003
- 木明智子. 主たる循環器ならびに関連薬剤と腎機能不全および透析療法における留意点 他. 腎機能障害患者の循環器病マネジメント (編集: 島本和明), 医学書院, pp.182-202, 2003
- 宮本 篤. 医薬品の使用禁忌とその理由 診療参加型臨床実習マニュアル (編集: 札幌医科大学医学部「臨床実習マニュアル編集委員会」), 三輪書店, pp.376-386, 2004
- 宮本 篤. 薬物血中濃度, 臨床試験 薬学生・実習指導者のための実務実習ガイドブック (総監修: (財) 日本薬剤師研修センター), 南山堂, pp.436-497, 500-541, 2005
- 國本雄介. バンコマイシン TDM 実践ハンドブック (編集: 北海道 TDM 研究会), 薬事新報社, pp.74-75, 2007
- 中田浩雅. 口内炎・胃粘膜障害 すぐに役立つがん患者症状コントロールに用いる薬の使い方と注意点 (監修: 並木昭義, 川股知之), 真興交易医書出版部, pp.110-114, 2008
- 大森克哉. かゆみ・めまい すぐに役立つがん患者症状コントロールに用いる薬の使い方と注意点 (監修: 並木昭義, 川股知之), 真興交易医書出版部, pp.115-120, 2008
- 中田浩雅. チーム医療における薬剤師の役割 すぐに役立つがん患者緩和ケアにおけるコメディカルの技とコツ (監修: 並木昭義, 川股知之), 真興交易医書出版部, pp.44-46, 2009
- 宮本 篤. 薬剤師の病棟配置によるチーム医療の推進 病院薬剤師業務推進事例集 3 (監修: (一社) 日本病院薬剤師会), pp.22-27, 2013
- 宮本 篤, 北川 学. ハイリスク薬 医師・薬剤師のための医薬品副作用ハンドブック (監修: 寺本民生), 日本臨床社, pp.11-15, 2013
- 中村勝之, 安井 寛. 血小板減少症 がん薬物療法の支持療法マニュアル (監修: 遠藤一司), 南江堂, pp.123-129, 2013
- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理 治療薬マニュアル 2014 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.20-23, 2014
- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理指導 治療薬マニュアル 2015 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.21-23, 2015
- 國本雄介. 抗 HIV 薬 薬学生・薬剤師レジデントのための感染症学・抗菌薬治療テキスト (監修: 二木芳人), じほう, pp.451-466, 2015
- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理指導 治療薬マニュアル 2016 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.20-23, 2016
- 國本雄介. 糖尿病合併の下肢熱傷後骨髄炎疑い患者に対する MRSA 感染症治療を支援した症例 臨床現場で役立つ! 事例から学ぶ TDM のエッセンス (編集: 日本 TDM 学会 TDM 事例集編集委員会), じほう, pp.36-41, 2016
- 中村勝之. トラスツズマブ エムタンシン がん化学療法レジメン管理マニュアル第 2 版 (監修: 濱 敏弘), 医学書院, pp.104-108, 2016

- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理指導 治療薬マニュアル 2017 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.21-24, 2017
- 國本雄介. HIV 薬剤師が知っておきたいチーム医療実践のための感染症検査 (監修: 大曲貴夫), 南山堂, pp.139-147, 2017
- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理指導 治療薬マニュアル 2018 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.20-24, 2018
- 國本雄介. 抗 HIV 薬 薬学生・薬剤師レジデントのための感染症学・抗菌薬治療テキスト第 2 版 (監修: 二木芳人), じほう, pp.461-474, 2018
- 宮本 篤, 北川 学. 副作用アセスメントの実践 麻薬による尿閉が疑われた! 医薬品副作用アセスメント (編集: 宇野勝次, 藤森勝也, 佐藤光利), 南山堂, pp.325-328, 2018
- 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理 治療薬マニュアル 2019 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.25-28, 2019
- 北川 学, 宮本 篤. ハイリスク薬投与患者の薬学的管理 治療薬マニュアル 2020 (監修: 高久史麿, 矢崎義雄), 医学書院, 付録 pp.29-33, 2020
- 木明智子, 我孫子彩子, 大森克哉, 北川 学, 宮本 篤. 血液製剤, 糖尿病治療薬, 麻薬及び類似薬 医薬品副作用・安全性ガイドブック (監修: 日本医薬品安全性学会), 南山堂, 印刷中, 2020

2. 総説

- 川股知之, 中田浩雅, 並木昭義. 新しい鎮痛薬と疼痛管理, 日本病院薬剤師会雑誌 39: 5-9, 2003
- 宮本 篤. 食品や健康食品と医薬品の意外な関係ケア 24: 31, 2006
- 宮本 篤. 臨床研究(治験)における医療人薬剤師の新たな展開, 日本病院薬剤師会誌 43: 985, 2007
- 宮本 篤. 大規模災害時の薬物療法の在り方と医薬品供給の危機管理体制, 札幌医学雑誌 80: 7-13, 2011
- 宮本 篤. ハイリスク薬, 日本臨床 70(suppl 6): 766-770, 2012
- 藤居 賢, 吉岡 薫, 國本雄介, 清治翔伍, 桧山佳樹, 高橋 聡, 舛森直哉, 宮本 篤. 抗菌化学療法認定薬剤師の役割と病棟専従薬剤師への支援 - 泌尿器科領域 -, 日本化学療法学会雑誌 65: 564-567, 2017

3. 原著(英文)

- Ariyoshi N, Sekine H, Saito K, Kamataki T. Characterization of a genotype previously designated as CYP2A6 D-type: CYP2A6*4B, another entire gene deletion allele of the CYP2A6 in Japanese. Pharmacogenetics 12: 501-504, 2002
- Saito K, Miyake S, Moriya H, Yamazaki M, Itoh F, Imai K, Kurosawa N, Owada E, Miyamoto A. Detection of the four sequence variations of MDR1 gene using TaqMan® MGB probe based real-time PCR and haplotype analysis in healthy Japanese subjects. Clin Biochem 36: 511-518, 2003
- Ariyoshi N, Sekine H, Nakayama K, Saito K, Miyamoto A, Kamataki T. Identification of deletion-junction site of

- CYP2A6*4B allele lacking entire coding region of CYP2A6 in Japanese. *Pharmacogenetics* 14: 701-705, 2004
4. Saito K, Moriya H, Sawaguchi T, Hayakawa T, Nakahara S, Goto A, Arimura Y, Imai K, Kurosawa N, Owada E, Miyamoto A. Haplotype analysis of UDP-glucuronocyltransferase 2B7 gene (UGT2B7) polymorphisms in healthy Japanese subjects. *Clin Biochem* 39: 303-308, 2006
 5. Yamakage M, Miyamoto A. Impression of the Conference for Promotion of International Collaborative Clinical Research, Beppu, January 13, 2007. *J Anesthesia* 21: 521-522, 2007
 6. Nakahara S, Arimura Y, Saito K, Goto A, Motoya S, Shinomura Y, Miyamoto A, Imai K. Association of SLC22A4/5 Polymorphisms with Steroid Responsiveness of Inflammatory Bowel Disease in Japan. *Diseases of the Colon & Rectum* 51: 598-603, 2008
 7. Onogi H, Ishigaki S, Nakagawasai O, Arai-Kato Y, Arai Y, Watanabe H, Miyamoto A, Tan-no K, Tadano T. Influence of memantine on brain monoaminergic neurotransmission parameters in mice: Neurochemical and Behavioral study. *Biol Pharm Bull* 32: 850-855, 2009
 8. Kunimoto Y, Yasui H, Touda N, Okazaki M, Nakata H, Noda N, Ikeda H, Hayashi T, Takahashi S, Shinomura Y, Ishida T, Miyamoto A. Coadministration of tenofovir decreased atazanavir plasma concentration after unilateral nephrectomy. *J Infect Chemother* 19: 750-753, 2013
 9. Fujii S, Takahashi S, Makino S, Kunimoto Y, Nakata H, Noda N, Sakurai K, Miyamoto A. Impact of vancomycin or linezolid therapy on development of renal dysfunction and thrombocytopenia in Japanese patients. *Chemotherapy* 59: 319-324, 2013
 10. Ishiwatari H, Hayashi T, Yoshida M, Ono M, Masuko H, Sato T, Miyanishi K, Sato Y, Takimoto R, Kobune M, Miyamoto A, Sonoda T, Kato J. Phenol-based endoscopic ultrasound-guided celiac plexus neurolysis for East Asian alcohol-intolerant upper gastrointestinal cancer patients: A pilot study. *World J Gastroenterol* 20: 10512-10517, 2014
 11. Ishiwatari H, Hayashi T, Yoshida M, Ono M, Sato T, Miyanishi K, Sato Y, Takimoto R, Kobune M, Masuko H, Miyamoto A, Sonoda T, Kato J. EUS-guided celiac plexus neurolysis by using highly viscous phenol-glycerol as a neurolytic agent (with video). *Gastrointestinal Endoscopy* 81: 479-483, 2015
 12. Kunimoto Y, Ikeda H, Fujii S, Kitagawa M, Yamazaki K, Nakata H, Noda N, Ishida T, Miyamoto A. Plasma tenofovir trough concentrations are associated with renal dysfunction in Japanese patients with HIV infection: a retrospective cohort study. *Journal of Pharmaceutical Health Care and Sciences* 2: 22, 2016
 13. Yoshioka K, Ohmori K, Iwasaki S, Takahashi K, Sato A, Nakata H, Miyamoto A, Yamakage M. A case of warfarinized renal cancer patient monitored for prothrombin time-international normalized ratio during methadone introduction. *JA Clinical Reports* 3: 35, 2017
 14. Kitagawa M, Shiraishi T, Yamamoto S, Kutomi R, Ohkoshi Y, Sato T, Wakui H, Itoh H, Miyamoto A, Yokota SI. Novel antimicrobial activities of a peptide derived from a Japanese soybean fermented food, Natto, against *Streptococcus pneumoniae* and *Bacillus subtilis* group strains. *AMB Express* 7: 127, 2017
 15. Uemura S, Yokota SI, Shiraishi T, Kitagawa M, Hirayama S, Kyan R, Mizuno H, Sawamoto K, Inoue H, Miyamoto A, Narimatsu E. Adaptive Cross-Resistance to Aminoglycoside Antibiotics in *Pseudomonas aeruginosa* Induced by Topical Dosage of Neomycin. *Chemotherapy* 62: 121-127, 2017
 16. Katano S, Hashimoto A, Ohori K, Watanabe A, Honma R, Yanase R, Ishigo T, Fujito T, Ohnishi H, Tsuchihashi K, Ishiai S, Miura T. Nutritional status and energy intake as predictors of functional status after cardiac rehabilitation in elderly inpatients with heart failure- A retrospective cohort study. *Circ J* 82: 1584-1591, 2018
 17. Takada K, Murase K, Nakamura H, Hayasaka N, Arihara Y, Iyama S, Ikeda H, Emori M, Sugita S, Nakamura K, Miyanishi K, Kobune M, Kato J. Pneumothorax as an Adverse Event in Patients with Lung Metastasis of Soft Tissue Sarcoma under Eribulin Treatment: Two Case Reports. *Intern Med* 2019 Jun 27. doi: 10.2169/internalmedicine.2790-19.